

## ヴィヴァルディ:『四季』より冬

アントニオ・ヴィヴァルディ(1678-1741)

『四季』は1725年に出版されたヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』作品8の第1番から第4番の総称です。この4曲にはそれぞれ、おそらくヴィヴァルディ自身が書いたと言われているソネット(14行から成るヨーロッパの定型詩)が付いています。音楽の雰囲気にも合っているので、ご本人が書いたと信じたいですね。ソネットを全文紹介したいと思います。

- I. A.冷たい雪にガタガタふるえ B.はげしい風の吹く中を  
C.ひっきりなしに足ぶみしながら駆けている D.あんまり寒いので歯の根が合わずカタカタ鳴る
- II. E.暖かいだんろで人々が安らかに過ごす間に万物は恵みの雨ですっかりうるおう
- III.F.氷の上をゆっくり歩く G.ひっくりかえらぬように気をつけて  
H.いきおいよく歩いてみたらたちまちすべってひっくりかえった  
I.おきあがって また氷の上をいきおいよく歩いてみたが L.またひっくりかえって氷がさけた  
M.とざされたとびらを開いて外に出れば N.春風が北風を追い払うように吹いているこれが冬だ  
冬もこんな 楽しみがある (全音楽譜出版社より)

この作品を聴くと冬の風景が広がり、氷上や雪原を歩く感触、肌がピリっとする寒さを感じることでしょう。本日は小さいけれどもパワフルなソリスト3名とひばり音楽教室の皆の演奏をお楽しみください。

(井木 恵)

## モーツァルト:ディヴェルティメント ニ長調 K.136

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791)

モーツァルトは父親レオポルトに才能を見出され、3歳から音楽の手ほどきを受け、遅くとも5歳には作曲を始めました。度々父の演奏旅行に同行し、主にイタリアでは各地の有名な音楽家に習い、幼いながらに新しい刺激を受けたようです。

〈ディヴェルティメントニ長調K.136〉は、彼が16歳の頃、2度目のイタリア旅行の直後の作品です。弦楽四重奏がオリジナルですが、今日では弦楽合奏の名作として世界中の子どもから大人までに愛される作品です。彼の生まれ故郷でもあり作曲された地にちなんで、「ザルツブルク・シンフォニー」とも呼ばれています。  
(ディヴェルティメントK.137,138を含む)

ワクワクするようリズムに乗って1stヴァイオリンの流麗な旋律が輝く第1楽章、心の中にそっとしまっておきたいくらい温かな第2楽章、イタリアで学んだモーツァルトらしくとびきりチャーミングな第3楽章、どうぞお楽しみください。

(山内 睦大)